

事業所名： 認知症対応型共同生活介護施設グループホームぬくもり(さくらユニット)

【事業所概要(事業所記入)】

事業所番号	0393100128		
法人名	社会福祉法人 健慈会		
事業所名	認知症対応型共同生活介護施設グループホームぬくもり(さくらユニット)		
所在地	〒028-8202 岩手県九戸郡野田村大字玉川第5地割45-22		
自己評価作成日	令和5年10月6日	評価結果市町村受理日	令和5年12月20日

【事業所が特に力を入れている点・アピールしたい点(事業所記入)】

利用者様一人ひとりの生活歴からヒントをいただき、その人らしく毎日穏やかに生き生きと過ごせる場所を目指します。日々の生活の中で培ってきた日課や役割を持っていただくことで、他者の役に立つ喜びを感じていただけるような支援を心掛けています。共用型デイサービス事業を実施しているため、地域で在宅生活を送られている方々との交流も盛んです。いつも賑やかなユニットです。

※事業所の基本情報は、公表センターページで閲覧してください。(↓このURLをクリック)

基本情報リンク先 https://www.kaigokensaku.mhlw.go.jp/03/index.php?action_kouhyou

【外部評価で確認した事業所の優れている点、工夫点(評価機関記入)】

三陸鉄道の野田玉川駅前に位置し、開設11年目の2ユニットの事業所である。併設の特別養護老人ホームと連携一体的に運営している。基本理念としている、地域や家族との結びつきを重視した地域密着型サービス提供の実践に努めている。コロナ禍において、地域とのつながりの継続に苦慮しているが、中でも地域の小学校行事の見学に出掛たり、施設広報誌、ぬくもり新聞を地域住民にも回覧して情報発信に努め、出来る限り地元のイベントなどにも出掛けられるよう検討している。入居者の意思、人格を尊重した日々のケアの実践として、職員の教育研修を取入れ、重度化が見られてきた入居者には、ACPIによる話し合いを重ね、入居者ご本人が苦しまない環境の提供として、併設する特養等への住み替えを提案している。現在は、コロナ禍により認知症カフェ、こどもの居場所づくり「フリースペース」の地域貢献事業を中断している状況であるが、再始動も視野に検討している。地域の福祉活動の拠点として、地域から期待されている事業所である。

【評価機関概要(評価機関記入)】

評価機関名	特定非営利活動法人 いわたの保健福祉支援研究会
所在地	〒020-0871 岩手県盛岡市中ノ橋通2丁目4番16号
訪問調査日	令和5年11月7日

V. サービスの成果に関する項目(アウトカム項目) ※項目No.1~55で日頃の取り組みを自己点検したうえで、成果について自己評価します

項目		取り組みの成果 ↓該当するものに○印	項目	取り組みの成果 ↓該当する項目に○印
56	職員は、利用者の思いや願い、暮らし方の意向を掴んでいる (参考項目:23,24,25)	○ 1. ほぼ全ての利用者の 2. 利用者の2/3くらいの 3. 利用者の1/3くらいの 4. ほとんど掴んでいない	63	職員は、家族が困っていること、不安なこと、求めていることをよく聴いており、信頼関係ができている (参考項目:9,10,19)
57	利用者と職員が、一緒にゆったりと過ごす場面がある (参考項目:18,38)	○ 1. 毎日ある 2. 数日に1回程度ある 3. たまにある 4. ほとんどない	64	通いの場やグループホームに馴染みの人や地域の人々が訪ねて来ている (参考項目:2,20)
58	利用者は、一人ひとりのペースで暮らしている (参考項目:38)	○ 1. ほぼ全ての利用者が 2. 利用者の2/3くらいが 3. 利用者の1/3くらいが 4. ほとんどいない	65	運営推進会議を通して、地域住民や地元の関係者とのつながりが拡がったり深まり、事業所の理解者や応援者が増えている (参考項目:4)
59	利用者は、職員が支援することで生き生きとした表情や姿がみられている (参考項目:36,37)	○ 1. ほぼ全ての利用者が 2. 利用者の2/3くらいが 3. 利用者の1/3くらいが 4. ほとんどいない	66	職員は、生き生きと働けている (参考項目:11,12)
60	利用者は、戸外の行きたいところへ出かけている (参考項目:49)	○ 1. ほぼ全ての利用者が 2. 利用者の2/3くらいが 3. 利用者の1/3くらいが 4. ほとんどいない	67	職員から見て、利用者はサービスにおおむね満足していると思う
61	利用者は、健康管理や医療面、安全面で不安なく過ごせている (参考項目:30,31)	○ 1. ほぼ全ての利用者が 2. 利用者の2/3くらいが 3. 利用者の1/3くらいが 4. ほとんどいない	68	職員から見て、利用者の家族等はサービスにおおむね満足していると思う
62	利用者は、その時々状況や要望に応じた柔軟な支援により、安心して暮らしている (参考項目:28)	○ 1. ほぼ全ての利用者が 2. 利用者の2/3くらいが 3. 利用者の1/3くらいが 4. ほとんどいない		

令和 5 年度

2 自己評価および外部評価結果

事業所名 : 認知症対応型共同生活介護施設グループホームぬくもり(さくらユニット)

自己	外部	項目	自己評価		外部評価	
			実践状況	実践状況	次のステップに向けて期待したい内容	
I.理念に基づく運営						
1	(1)	○理念の共有と実践 地域密着型サービスの意義をふまえた事業所理念をつくり、管理者と職員は、その理念を共有して実践につなげている	基本理念はユニット内に掲示し、会議の時に出席者で唱和し意識を高めるよう努めている。	基本理念に基づいた事業計画を毎年度策定し、2か月ごとに開催するユニット会議において、毎月の目標を評価し、次月の目標を設定している。年度末に事業計画を評価、総括したうえで入居者の特性も考慮した次年度事業計画に反映させている。		
2	(2)	○事業所と地域とのつきあい 利用者が地域とつながりながら暮らし続けられるよう、事業所自体が地域の一員として日常的に交流している	コロナ禍により地域の学校や保育園との交流は現在もできていない。本年も地域企業の宅配弁当を利用するだけとなっている。	事業所前の野田玉川駅のプランターの花植え、周辺のごみ拾い等を行い、地域の婦人会の方々と顔を合わせる機会にもなっている。また、地元小学校の運動会の見学にも、出掛けられるようになってきた。年4回発行の施設広報、毎月のグループホーム新聞を村の回覧物と併せて地域へ情報発信を図っている。	コロナ禍で中断していた認知症カフェの再開や、子どもの居場所事業の再開を予定している。法人の施設や機能も活かしながら、地域の多様な方々との交流が一層活発になることを期待します。	
3		○事業所の力を活かした地域貢献 事業所は、実践を通じて積み上げている認知症の人の理解や支援の方法を、地域の人々に向けて活かしている	認知症カフェを開催し、相談・支援の場を設けていたが、昨年同様にコロナ禍の影響にて実施することができなかった。			
4	(3)	○運営推進会議を活かした取り組み 運営推進会議では、利用者やサービスの実際、評価への取り組み状況等について報告や話し合いを行い、そこでの意見をサービス向上に活かしている	感染対策のため、開催できない月もあった。利用状況などの報告をし、近隣住民の情報提供を頂いている。	会議は、併設の特養施設と併せて開催している。構成委員として、入居者家族、村担当課、地域包括支援センター、民生委員、地域住民の方々をお願いしている。防災やコロナ対策など活発な発言やコロナ禍での面会の在り方についての提案、要望を受け、運営に反映させている。		
5	(4)	○市町村との連携 市町村担当者とは頃から連絡を密に取り、事業所の実情やケアサービスの取り組みを積極的に伝えながら、協力関係を築くように取り組んでいる	管理者が地域ケア会議に参加し情報共有を行っている。また、個別ケースの問題解決に向けた話し合いの取り組みを行っている。	毎月開催の地域ケア会議に管理者が出席し、情報交換や事例検討等を実施し、認知症事例では助言等を行っている。コロナ禍対策に、村から検査キットやマスクの配布を受けるなど、協力関係は密である。		
6	(5)	○身体拘束をしないケアの実践 代表者及び全ての職員が「指定地域密着型サービス指定基準及び指定地域密着型介護予防サービス指定基準における禁止の対象となる具体的な行為」を正しく理解しており、玄関の施錠を含めて身体拘束をしないケアに取り組んでいる	委員会が中心となり、身体拘束廃止に向けた取り組みを行っている。 施設内研修を通じて知識と技術の向上にむけた啓発の機会がある。	施設長、管理者、ケアマネ、相談員で構成する権利擁護委員会(身体拘束防止・虐待防止)を3か月ごとに開催している。また、実際のケア場面を動画にした振り返りの研修を年2回実施しグループワークで話し合うとともに、言葉遣い見直し月間を設定しポスターを掲示して啓発に努めている。		

令和 5 年度

2 自己評価および外部評価結果

事業所名 : 認知症対応型共同生活介護施設グループホームぬくもり(さくらユニット)

自己	外部	項目	自己評価	外部評価	
			実践状況	実践状況	次のステップに向けて期待したい内容
7		○虐待の防止の徹底 管理者や職員は、高齢者虐待防止関連法について学ぶ機会を持ち、利用者の自宅や事業所内での虐待が見過ごされることのないよう注意を払い、防止に努めている	施設内研修を年2回実施、新人職員へは入職時に研修を行う等、虐待防止について学ぶ機会を設けている。7月には言葉遣い見直し月間を設け、ポスター掲示を行うなど、日頃から意識するように努めている。		
8		○権利擁護に関する制度の理解と活用 管理者や職員は、日常生活自立支援事業や成年後見制度について学ぶ機会を持ち、個々の必要性を関係者と話し合い、それらを活用できるよう支援している	権利擁護委員会を設置し、社会福祉士を中心に疏泄内研修を行うなど、多様性を受け入れる事について研修を重ねている。		
9		○契約に関する説明と納得 契約の締結、解約又は改定等の際は、利用者や家族等の不安や疑問点を尋ね、十分な説明を行い理解・納得を図っている	入所の際は契約書・重要事項説明書の内容を十分に理解していただけるように時間をかけて説明している。不安や疑問点については、いつでも相談していただくよう、家族の来設時には声をかけるよう努めている。		
10	(6)	○運営に関する利用者、家族等意見の反映 利用者や家族等が意見、要望を管理者や職員ならびに外部者へ表せる機会を設け、それらを運営に反映させている	運営推進会議へは家族の代表の方に参加いただき、意見・要望を聞かせていただく機会としている。	運営推進会議の家族委員からのご意見を伺ったり、面会や通院付き添い時などにご意見や要望等を伺う事がある。また、入居者の3分の2のご家族がライン登録をされており、個別に相談や入居者の近況等の情報提供に努めている。	
11	(7)	○運営に関する職員意見の反映 代表者や管理者は、運営に関する職員の意見や提案を聞く機会を設け、反映させている	ユニット会議の際は職員が積極的に意見を出し合い、施設長、管理者間で意見・提案をどのように反映していくか話し合うようにしている。	今年から管理者と個別面談を実施し、多様な意見を受け止めながら、今後のキャリアや勤務シフト等の相談の機会にもしている。管理者、各ユニットリーダーが双方のユニット会議に出席し、入浴対応等のケアの検討や施設設備の修繕等の要望等を受け、可能なものから具体化している。	
12		○就業環境の整備 代表者は、管理者や職員個々の努力や実績、勤務状況を把握し、給与水準、労働時間、やりがいなど、各自が向上心を持って働けるよう職場環境・条件の整備に努めている	個々の労働条件を考慮した勤務時間で就労できるよう、管理者と面談する機会を設けている。		

事業所名 : 認知症対応型共同生活介護施設グループホームぬくもり(さくらユニット)

自己	外部	項目	自己評価	外部評価	
			実践状況	実践状況	次のステップに向けて期待したい内容
13		○職員を育てる取り組み 代表者は、管理者や職員一人ひとりのケアの実際と力量を把握し、法人内外の研修を受ける機会の確保や、働きながらトレーニングしていくことを進めている	職員の経験年数や普段の様子を見て判断し、その研修や役割などに適した職員を選んでいる。		
14		○同業者との交流を通じた向上 代表者は、管理者や職員が同業者と交流する機会を作り、ネットワークづくりや勉強会、相互訪問等の活動を通じて、サービスの質を向上させていく取り組みをしている	月1回の地域ケア会議の場には管理者が出席し、情報交換や交流の機会としている。		
Ⅱ.安心と信頼に向けた関係づくりと支援					
15		○初期に築く本人との信頼関係 サービスを導入する段階で、本人が困っていること、不安なこと、要望等に耳を傾けながら、本人の安心を確保するための関係づくりに努めている	入所時、管理者が聞き取り面談を行い、その情報を職員間で情報共有し、対応を統一し困惑しないように心がけている。		
16		○初期に築く家族等との信頼関係 サービスを導入する段階で、家族等が困っていること、不安なこと、要望等に耳を傾けながら、関係づくりに努めている	管理者からの情報をもとに行っている。相談しやすい環境づくりのため分かりやすい言葉で説明したり、家族の目線で考え対応するよう努めている。		
17		○初期対応の見極めと支援 サービスを導入する段階で、本人と家族等が「その時」まず必要としている支援を見極め、他のサービス利用も含めた対応に努めている	専門職としての知識を活かし、アドバイスできるようにしている。また、希望に沿えるよう他のサービス事業所との連携も行っている。		
18		○本人と共に過ごし支えあう関係 職員は、本人を介護される一方の立場におかず、暮らしを共にする者同士の関係を築いている	生活の中で役割を持っていただけるよう、ケアプランにも取り入れ、個々に合った作業等を行っていただいている。		
19		○本人を共に支えあう家族との関係 職員は、家族を支援される一方の立場におかず、本人と家族の絆を大切にしながら、共に本人を支えていく関係を築いている	近況報告を行いながら、家族の思いを汲み取り、出来る限り意向に沿えるよう、職員間で情報共有し支援して。		

自己	外部	項目	自己評価	外部評価	
			実践状況	実践状況	次のステップに向けて期待したい内容
20	(8)	○馴染みの人や場との関係継続の支援 本人がこれまで大切にしてきた馴染みの人や場所との関係が途切れないよう、支援に努めている	面会で馴染みの人と会ったり、外出を計画して思い出の場所を巡る機会を提供している。	生活歴や家族からの情報により、馴染みの人や場を把握している。家族の他、知人や隣人、デイサービス利用者との面会が増えている。年3、4回バスレクとして、自宅巡りやまつりの山車見学などに出掛け、道の駅に立ち寄り飲食も楽しんでいる。毎月地元理容業者が訪問しているほか、馴染みの美容院に出掛ける方もいる。	
21		○利用者同士の関係の支援 利用者同士の関係を把握し、一人ひとりが孤立せずに利用者同士が関わり合い、支え合えるような支援に努めている	利用者様同士の関係性を把握し、関係を維持しやすい環境づくりに努めている。日々の様子を観察し、関係性の変化に対応している。		
22		○関係を断ち切らない取組み サービス利用(契約)が終了しても、これまでの関係性を大切にしながら、必要に応じて本人・家族の経過をフォローし、相談や支援に努めている	サービス終了後も必要に応じて利用者様や家族のフォローを行うよう努めている。		
Ⅲ. その人らしい暮らしを続けるためのケアマネジメント					
23	(9)	○思いや意向の把握 一人ひとりの思いや暮らし方の希望、意向の把握に努めている。困難な場合は、本人本位に検討している	一人ひとりの日々の生活観察やコミュニケーションから、意向を把握しよう努めている。その情報を共有して、想いを実現できるよう相談する場を設けている。	担当職員を中心に常時入居者からの思いや要望を聴き取るようにしている。言葉での意思表示が難しい方は日常を観察しての仕草や表情、ご家族からの情報に基づき意向の把握に努めている。	
24		○これまでの暮らしの把握 一人ひとりの生活歴や馴染みの暮らし方、生活環境、これまでのサービス利用の経過等の把握に努めている	一人ひとりの生活歴や暮らし方、環境等の情報をまとめて職員間で共有している。情報は日々更新され、変化に対応できるよう努めている。		
25		○暮らしの現状の把握 一人ひとりの一日の過ごし方、心身状態、有する力等の現状の把握に努めている	一人ひとりの一日の生活を観察し、現状の心身状況に照らし合わせて、利用者様が有する力を発揮できる生活が送れるよう支援している。		
26	(10)	○チームでつくる介護計画とモニタリング 本人がより良く暮らすための課題とケアのあり方について、本人、家族、必要な関係者と話し合い、それぞれの意見やアイデアを反映し、現状に即した介護計画を作成している	定期的カンファレンスを実施し、課題が見つかった場合は必要な情報を収集し、利用者様や家族を含めて相談しながら解決方法を考えて介護計画に反映している。	モニタリングは担当職員が中心となってケアマネと共に、家族の意向を加味して介護計画案を作成している。原則6か月毎にサービス担当者会議で原案についてカンファレンスしている。苦しまない環境を要望される方もおり、ACPIによる検討も行っている。	

令和 5 年度

2 自己評価および外部評価結果

事業所名 : 認知症対応型共同生活介護施設グループホームぬくもり(さくらユニット)

自己	外部	項目	自己評価	外部評価	
			実践状況	実践状況	次のステップに向けて期待したい内容
27		○個別の記録と実践への反映 日々の様子やケアの実践・結果、気づきや工夫を個別記録に記入し、職員間で情報を共有しながら実践や介護計画の見直しに活かしている	変化があった際には、発覚からその後の経過がどうなったかわかるように各勤務時間帯でつながる記録に努めている。介護計画は個人のカルテに挟むことで内容を周知し対応できるようにしている。		
28		○一人ひとりを支えるための事業所の多機能化 本人や家族の状況、その時々生まれるニーズに対応して、既存のサービスに捉われない、柔軟な支援やサービスの多機能化に取り組んでいる	家族の事情に合わせて受診対応を受け付け、利用者様の希望を家族と共有し、家族に依頼することで協力をいただいている。		
29		○地域資源との協働 一人ひとりの暮らしを支えている地域資源を把握し、本人が心身の力を発揮しながら安全で豊かな暮らしを楽しむことができるよう支援している	コロナウイルス感染防止のため、思うように実施は出来ていない。 資源の活用としては、薬の配達、弁当宅配など。		
30	(11)	○かかりつけ医の受診支援 受診は、本人及び家族等の希望を大切に、納得が得られたかかりつけ医と事業所の関係を築きながら、適切な医療を受けられるように支援している	家族と情報共有し、意思への相談や情報共有に努めている。必要に応じてかかりつけ医から紹介状を作成していただき、症状に合った科の受診を勧めている。	入居時に通院は原則家族での対応をお願いしている。遠方にいる家族からは、事業所での付添いを依頼する方もいる。毎月、地元歯科が訪問され、入居者とも馴染みとなっている。特養看護師が24時間オンコールの体制をとっている。	
31		○看護職との協働 介護職は、日常の関わりの中でとらえた情報や気づきを、職場内の看護職や訪問看護師等に伝えて相談し、個々の利用者が適切な受診や看護を受けられるように支援している	利用者様に変化があった際は、軽微な変化でも看護師に相談し医療的な視点から指示助言をいただき対応している。個々人に合わせた細やかなケアが出来ていると感じる。		
32		○入退院時の医療機関との協働 利用者が入院した際、安心して治療できるように、又、できるだけ早期に退院できるように、病院関係者との情報交換や相談に努めている。あるいは、そうした場合に備えて病院関係者との関係づくりを行っている	入院時には情報提供書を持参し病院に提出している。入院中の様子も家族等から聞き取りを行い、把握するように努めている。		

自己	外部	項目	自己評価	外部評価	
			実践状況	実践状況	次のステップに向けて期待したい内容
33	(12)	○重度化や終末期に向けた方針の共有と支援 重度化した場合や終末期のあり方について、早い段階から本人・家族等と話し合いを行い、事業所でできることを十分に説明しながら方針を共有し、地域の関係者と共にチームで支援に取り組んでいる	利用者様に変化があったときはなるべく早期に家族に伝え、適切な協力が得られるよう努めている。職員間でも情報共有を行い、看護師に相談する等、利用者様の状態に合わせたケアができるよう努めている。	事業所として看取りは行っていないが、重度化が進んできた方には、家族、スタッフ等による話し合いの機会(ACP)を設け、特養等への住み替えを提案している。看護師による看取り、緩和ケアの研修や特養でのデスカンファレンスへの参加機会を設けている。職員に看取りについてのヒアリングも行っている。	
34		○急変や事故発生時の備え 利用者の急変や事故発生時に備えて、全ての職員は応急手当や初期対応の訓練を定期的に行い、実践力を身に付けている	急変・事故発生時の対応マニュアルを整備し、職員それぞれが手順を把握し、いざという時の情報共有・連携に努めている。		
35	(13)	○災害対策 火災や地震、水害等の災害時に、昼夜を問わず利用者が避難できる方法を全職員が身につけるとともに、地域との協力体制を築いている	定期的に避難訓練を行い、災害発生時の対応について確認を行っている。	年2回、夜間想定を含めた避難訓練を実施し、消防署も立ち合っている。年1回、通報訓練も実施している。非常時は管理者からLINEで職員に一斉通報する体制が確保できている。食糧、水等を備蓄し、非常電源も備えている。	現在進めている事業継続計画の策定に併せて、災害対策全般を見直すとともに、併設の特養との連携や地域協力(自主防災組織の確認)を一層図ることを期待します。
IV. その人らしい暮らしを続けるための日々の支援					
36	(14)	○一人ひとりの尊重とプライバシーの確保 一人ひとりの人格を尊重し、誇りやプライバシーを損ねない言葉かけや対応をしている	大声でプライバシーに関わる声かけをしないように気を付けて支援を行っている。それぞれが穏やかに生活できるよう配慮して支援している。	権利擁護委員会主催の研修を行い、また管理者からは、言葉遣い、スピーチロックなど、職員個々や自身の親の立場に置き換えて振り返りを行っている。家族の状況や排泄等のプライバシーに関わることは、大声で誘導しない、居室で聴き取りするなど、各ユニットリーダー、ケアマネからも助言等を行っている。	
37		○利用者の希望の表出や自己決定の支援 日常生活の中で本人が思いや希望を表したり、自己決定できるように働きかけている	なるべく指示的ではなく提案の形をとれるよう努めている。希望に沿えない場合でも否定ではなく、なぜ希望に沿えないか説明して理解していただけるようにしている。		
38		○日々のその人らしい暮らし 職員側の決まりや都合を優先するのではなく、一人ひとりのペースを大切に、その日をどのように過ごしたいか、希望にそって支援している	それぞれの日課や気持ちを尊重し、体調なども考慮しながら、可能な範囲で希望にそった過ごし方ができるよう支援している。		

令和 5 年度

2 自己評価および外部評価結果

事業所名 : 認知症対応型共同生活介護施設グループホームぬくもり(さくらユニット)

自己	外部	項目	自己評価	外部評価	
			実践状況	実践状況	次のステップに向けて期待したい内容
39		○身だしなみやおしゃれの支援 その人らしい身だしなみやおしゃれができるように支援している	利用者様それぞれが社会性を維持し、季節や場面に合わせた服装ができるよう支援している。		
40	(15)	○食事を楽しむことのできる支援 食事が楽しみなものになるよう、一人ひとりの好みや力を活かしながら、利用者と職員と一緒に準備や食事、片付けをしている	ひとり一人の好みを考慮し、その日のメニューから嫌いなものがあると代替品を提供している。また献立には、寿司の日、お弁当、誕生日食、要望食があり、食事が楽しみになっている。準備や後片付けも一緒に行っている。	メニューは両ユニット共通であるが、それぞれにアレンジして提供している。入居者家族からマツタケやウニなどの食材をいただくことも多く、調理後の写真と共にお礼を伝えている。外食の機会が減り、月1回、お寿司のテイクアウトを提供している。入居者は、家庭菜園の野菜類等の下拵え、近所の商店に食材やおやつの買い出しを手伝っている。	
41		○栄養摂取や水分確保の支援 食べる量や栄養バランス、水分量が一日を通じて確保できるよう、一人ひとりの状態や力、習慣に応じた支援をしている	ひとり一人の状態に合わせて食事量、水分量を確保し、調整している。ご家族様からの差し入れも適時提供している。		
42		○口腔内の清潔保持 口の中の汚れや臭いが生じないよう、毎食後、一人ひとりの口腔状態や本人の力に応じた口腔ケアをしている	毎食後、口腔ケアの声掛けを行い必要に応じて介助を行っている。また、地域の歯科医院と連携し定期的に指導や診療を受けている。		
43	(16)	○排泄の自立支援 排泄の失敗やおむつの使用を減らし、一人ひとりの力や排泄のパターン、習慣を活かして、トイレでの排泄や排泄の自立にむけた支援を行っている	一人ひとりの排泄パターンを把握し、心身状態に合わせたトイレ誘導のタイミング、トイレ介助の方法を工夫している。	排泄チェック表でパターンを把握して、見守り・声掛け・誘導を行い、全員がトイレで排泄している。夜間ポータブルトイレを使用する方は数名いる。自宅では排泄の失敗があった方で、入居後の細やかな観察や適切な声掛け誘導で失禁が改善された方もある。	
44		○便秘の予防と対応 便秘の原因や及ぼす影響を理解し、飲食物の工夫や運動への働きかけ等、個々に応じた予防に取り組んでいる	便秘予防として飲食物の工夫や運動、必要に応じて主治医からの薬で対応している。		
45	(17)	○入浴を楽しむことができる支援 一人ひとりの希望やタイミングに合わせて入浴を楽しめるように、職員の都合で曜日や時間帯を決めてしまわずに、個々にそった支援をしている	できるだけ利用者様の希望に沿うよう、入浴支援を行っているが、デイサービスの利用者数や職員の感染状況により対応できていない日もある。	週2、3回提供している。入浴を拒まれる方には、着替えや足湯など柔軟な対応を心掛けている。浴槽が一般浴槽のため、身体機能の低下がみられる方は、特養の寝台浴槽で入浴を提供している。入浴中は介助の職員との会話が弾んでいる。	

令和 5 年度

2 自己評価および外部評価結果

事業所名 : 認知症対応型共同生活介護施設グループホームぬくもり(さくらユニット)

自己	外部	項目	自己評価	外部評価	
			実践状況	実践状況	次のステップに向けて期待したい内容
46		○安眠や休息の支援 一人ひとりの生活習慣やその時々状況に応じて、休息したり、安心して気持ちよく眠れるよう支援している	エアコンを使い温度の調整をしたり、電気も個々の好みに合わせている。季節や状況を考慮しながら良眠できるよう支援している。		
47		○服薬支援 一人ひとりが使用している薬の目的や副作用、用法や用量について理解しており、服薬の支援と症状の変化の確認に努めている	薬変更や与薬後はダブルチェックし、誤薬防止に努めている。受診時には利用者様の状態を家族に伝え、必要時は医療機関への情報提供を行っている。		
48		○役割、楽しみごとの支援 張り合いや喜びのある日々を過ごせるように、一人ひとりの生活歴や力を活かした役割、嗜好品、楽しみごと、気分転換等の支援をしている	洗濯物、新聞たたみなど、個々の能力に応じた役割を持ち、感謝を受ける喜びを感じていただく。家族からの嗜好品の差し入れを提供したり、気分転換のドライブをして楽しまされたりしている。		
49	(18)	○日常的な外出支援 一人ひとりのその日の希望にそって、戸外に出かけられるよう支援に努めている。 又、普段は行けないような場所でも、本人の希望を把握し、家族や地域の人々と協力しながら出かけられるように支援している	ドライブレクや地域の祭りを観覧している。コロナの感染状況を確認しながら外出支援を行っている。	事業所前にある野田玉川駅のプランターの花の世話や周辺のゴミ拾い、事業所の菜園で野菜の栽培などで外気浴と気分転換をしている。春の花見・秋の紅葉狩りなどのドライブに出かけ、道の駅に寄って楽しんでいる。家族と通院同行後ドライブし外食される方もいる。	
50		○お金の所持や使うことの支援 職員は、本人がお金を持つことの大切さを理解しており、一人ひとりの希望や力に応じて、お金を所持したり使えるように支援している	利用者様の状態により自己管理している利用者様もいる。紛失の危険があるため、基本的には事業所管理している。外出の際は自ら購入できるように支援している。		
51		○電話や手紙の支援 家族や大切な人に本人自らが電話をしたり、手紙のやり取りができるように支援をしている	事前に家族と対応方法の確認を行い、利用者様が希望するときには電話をしている。また、年賀状を欠かさずに出し、家族から贈り物があったときには電話をかけ、SNSを活用して写真を送っている。		

令和 5 年度

2 自己評価および外部評価結果

事業所名 : 認知症対応型共同生活介護施設グループホームぬくもり(さくらユニット)

自己	外部	項目	自己評価	外部評価	
			実践状況	実践状況	次のステップに向けて期待したい内容
52	(19)	○居心地のよい共用空間づくり 共用の空間(玄関、廊下、居間、台所、食堂、浴室、トイレ等)が、利用者にとって不快や混乱をまねくような刺激(音、光、色、広さ、温度など)がないように配慮し、生活感や季節感を採り入れて、居心地よく過ごせるような工夫をしている	共用スペースは清潔を心掛け、カーテンで光を調整するなど不快にならないよう努めている。また、季節ごとに利用者様と職員と一緒に制作した作品を飾るなど、季節感を感じられるよう工夫している。	食堂兼談話室には、テーブル、椅子、ソファ、大型テレビが置かれ、エアコンと床暖房、空気清浄機により快適な環境が保たれている。壁面には職員と一緒に制作した七夕祭り、花火、ハロウィン飾りや行事の写真が飾られ、季節感や潤いを感じられる共通空間となっている。	
53		○共用空間における一人ひとりの居場所づくり 共用空間の中で、独りになれたり、気の合った利用者同士で思い思いに過ごせるような居場所の工夫をしている	一人ひとりのその時の思いに合った場所で過ごせるよう、共用空間や一人で過ごすことができる場所など、環境にバリエーションをもたせて対応できるよう努めている。		
54	(20)	○居心地よく過ごせる居室の配慮 居室あるいは泊まりの部屋は、本人や家族と相談しながら、使い慣れたものや好みものを活かして、本人が居心地よく過ごせるような工夫をしている	生活歴や馴染みの暮らしの情報を反映した居室環境になるよう努めている。利用者様からの要望があった時は家族と相談しつつ要望に沿えるよう努めている。	居室入口に利用者お気に入りの暖簾が名札代わりに下げられている。居室にはベッド、洗面台、タンス、エアコンが設置され、テレビ、衣装ケース、家族写真を個々に持ち込んでいる。できる方には床のモップ掛け、タンス、手すりの拭き方もしていただいている。	
55		○一人ひとりの力を活かした安全な環境づくり 建物内部は一人ひとりの「できること」「わかること」を活かして、安全かつできるだけ自立した生活が送れるように工夫している	一人ひとりの有する力を安全に発揮できるように環境に問題が無いか検証して生活していただくよう努めている。心身状態に変化があった場合は、都度再検証するよう努めている。		